

ベートーヴェン・ハウス ボンでの 切手コレクション特別展

大沼幸雄



彩流社刊
『「第九」と日本
出会いの歴史』

『第九と日本 出会いの歴史』を監訳出版したことがご縁で、昨年10月ドイツのボンを訪れた時に、小生のコレクションをベートーヴェン・ハウス ボン（ボンと付くのは、ベートーヴェン・ハウスが随所に有るので区別するため）で展示することが、急遽決まりました。大慌てで準備をいたしました。

ベートーヴェン・ハウス ボンは、ベートーヴェンの生家で、現在は、博物館、アーカイブ、室内楽ホール、出版部門などがあり、1000点以上の自筆譜、書簡、会話帳、遺品、絵画、彫刻、楽器など世界最大のコレクションを誇っております。ここは音楽愛好家のメッカ、世界中から年間10万人の参観者があり、うち最低4,000人は日本人（日本語パンフの配布数より推定）だそうです。1993年9月13日、天皇皇后両陛下もここを訪れ「明仁・美智子」と署名を残しておられます。博物館では、常設展示物以外に、特別展示室が1室あり、毎年3回から4回程度、異なったテーマを取り上げていますが、その一つとして切手のコレクションが選ばれた次第です。開催期間は、3月19日～6月24日までの約3ヶ月間で、この原稿を書いている今現在も開催中です。

展示品は、昨年のフィラニッポン'11で金賞を頂いた128リーフの「ベートーヴェンそ

の生涯と遺産」の抜粋で、ショウ・ケースに合わせて特製サイズリーフ（310×400mm）30枚にまとまるように再構成したもの。制作の過程でマテリアルの選択、レイアウト、フォント、句読点のつけ方などにつき先方より細かい指摘があり、一流の博物館に出展する厳しさを痛感すると共に、良い勉強になったと思っております。その他、広報資料の準備、欧州郵趣メディアのリストアップ、招待客リストの作成、スピーチ原稿作成などにも時間がかかりました。

作品は、小生自身が持参しました。リーフの書き込みは英文ですが、博物館の学芸員が、各リーフの独訳を準備してくれました。前々日に、重たいショウ・ケースの蓋を持ち上げて一枚一枚並べ、蓋を下ろして施錠して、おさめ終わった時には、まさに肩の重荷が下りた感じでした。



ポスター



オープニングセレモニーの招待状



ショウ・ケースに展示品を収納中

開催に先立ち前日3月18日(日)16:00から室内楽ホール(収容人数200名)で、厳粛な雰囲気の中でオープニング・セレモニーが開催されました。約450枚の招待状に対して130名の方々にご来場いただきました。主には協会の会員でしたが、デュセルドルフ、ケルンなどの近郊在住の日本人、ドイツの郵趣の方々も駆けつけてくれました。とりわけ私が所属しているドイツ音楽郵趣グループの会長夫妻がベルリンから列車で来てくれたのには感激しました。



オープニング・セレモニーを待つ招待客たち



オープニング・セレモニーでのスピーチ



パーティ会場の光景

セレモニーは、最初に博物館館長のハニシュフェガー教授の、歓迎の辞、2回のピアノ演奏があり、演奏の合間に小生が「音楽郵趣と私の人生」というテーマで英語のスピーチをしました。内容は、FAQ(頻繁に出る3つの質問)に答えるというもので、何故ベートーヴェンを集めるか、どのように集めるか、投入額はどのくらいのものか、という3点です。投入額は「企業秘密」としてかわし、基本的には、投入額の多寡より、テーマティクの特徴である知識集約的、リサーチ集約的な側面を大いに強調したものになりました。ピアノ演奏は、デュッセルドルフにお住いのピアニスト伊藤愉紀氏で、演目はベートーヴェンの作品から「11のバガテル」(op.119)とピアノ・ソナタ第8番ハ短調「悲愴」(op.13)で、その熱演ぶりに深い感動を覚えました。バガテルは、「小品」を意味(フランス語で、「取るにたらないもの」の意)しますが、これを選んだのはベートーヴェン・ハウス側で、小さな作品を集めて一括りにしてある点は、切手のコレクションと類似性があるという思いがけない理由からでした。

オープニング・セレモニーの後は、全員を特別展示室へと案内し、そのあと裏庭とショップのスペースでワイン・パーティが開かれました。ベートーヴェンのパトロンであったグライヒェンシュタイン男爵の子孫が経営しているワイナリーの「グライヒェンシュタイン」ブランドの赤ワインが振る舞われ、参加者一同、ワイワイガヤガヤと賑やかで楽しい夕べを過ごすことができました。



自作P切手を用いての記念カバー



ドイツ音楽郵趣グループが制作してくれた特別展記念のPスタンプ。
(上左) 銅像とハウス裏手からの光景、(上右)補聴器、(左)月光の曲の自筆譜

メディア対応には周到な準備がされておりました。先ずオープニングの二週間前に詳しいプレスキットが配布され、引き続きオープニングの初日午前中が記者会見にあてられました。



メディアの取材風景

ローカル紙（ドイツはローカル紙中心で、日本のような全国紙はない）及び郵趣関連の9社の記者が重たいカメラを持って登場し、ブリーフィングの後、展示会場で質疑応答がありました。「この中でどれが一番古い切手か」「一番希少性が高いのはどれか」「何年位かけて集めたのか」などの質問が出ました。次の日の朝、ホテルのレセプションへ行ったら、「あなたが新聞に載っていますよ」と、受付嬢からローカル紙を見せられビックリしました。新聞には「切手によるベートーヴェンとその時代」との大見出しで、写真もカラーで大きく出ており、一躍、セレブになった気分です。後日、ベートーヴェン・ハウスが調べたところでは、大小の新聞・雑誌を合わせると約20に近い記事が出たそうです。郵趣関係は、ドイツ音楽郵趣グループが、メディアのリストアップをしており、一斉にプレス・リリースが流れたことも効果的でした。郵趣カタログで有名なミヒェルの月刊誌にも写真入りの報道が出て驚きました。



各紙の掲載記事

セレモニーの直後に招待客の一人であるブッシュさんという方から丁寧な礼状がメールで届きました。それによると「“切手によるベートーヴェン”とあるので、てっきりベートーヴェンの肖像のある切手を並べ、随所にエピソードを織り込んだものを想像していた。ところが、驚いたのは、これは、まさにベートーヴェンが生きた時代のミニチュア文化史であり、これほどまでに独創的で興味深いベートーヴェン像は、今まで見たことがない」とのこと。まさにテーマチック作品の真髄を一見で見抜いており、その眼力に驚くと共に、テーマチック郵趣家として冥利に尽きるコメント頂いたと思いました。

今回の展示をとしての感想ですが、第一に、やはり郵趣、それも1テーマを、徹底的に追求してきてよかったこと、第二に、ショウ・ケースに入れると、郵趣品は、アートの領域に属する美しさが際立つこと。これはリーフに貼って展示会で羅列するのとは、一味も二味も違う印象です。第三に、人の縁の不思議さです。一枚の古手紙からベートーヴェン・ハウス ボンの学芸員と知遇を得、そこから「第九」本の監訳、特別展へと広がったこと。

今回のオープニング・セレモニーの招待客リスト作成も、たまたま、ボン行の列車で知り合ったヴァイオリニストのご縁で多数の日本人に出状できたこと、ドイツ音楽郵趣グループの会長からさまざまな支援を頂いたことなどです。振り返ると、自分の生涯のハイライトともいふべきこの特別展は、様々な人のご縁で初めてできたことであると思ふ昨今です。



ミュンスター広場のベートーヴェン銅像



ボンはやはりベートーヴェンの町・市内の随所にあるベートーヴェン像